

## 1970～2000年における昼夜間人口から見る七都市圏の特徴・分析

初等教育教員養成課程 社会選修 鈴木 淳史

大都市圏への人口集中が著しくなり、人口移動の構造に変化が見られるようになった。また、昼間と夜間とで人口分布が異なる様相も呈している。

本稿では、三大都市圏と広域中心都市を対象地域として取り上げ、昼夜間人口の分布やその変化について分析、考察を行うこととした。全ての都市圏において同様の変化を見せるかどうかを検討することを目的としている。その際、国勢調査による昼間人口、夜間人口のデータを用いた。また、これらの人口から求められる昼夜間人口比率を基にして、都市圏の昼夜間人口分布を市町村別、距離別に整理をしてまとめた。その結果、全ての都市圏における昼間人口は都心に、夜間人口は郊外に集中していることが明らかとなった。しかし、三大都市圏では昼間人口が都心において次第に減少しており、郊外へと移動する様子が見られる。広域中心都市では都心へより集中しており、三大都市圏とは異なる変化を見せていることが分かった。

次に、昼夜間人口比率の増加率を各年代で比較し、都市圏ごとの昼夜間人口の変化について分析を行った。増加率を見ると、都心で減少傾向にある都市、都心への集中がより顕著な都市などの変化を見せている。これらことから、昼夜間人口の変化をパターン化すると、4つのパターンに分けることができると考えられる。つまり、都市の昼夜間人口の変化は1つだけではなく、人口規模や都市の大きさなどが影響して、さまざまな変化を見せていることが明らかとなった。

昼・夜間人口や昼夜間人口比率を指標として、概念的にパターン化をすることで、都市圏における1日の人口動態を把握することができる。分析結果を基に、昼・夜間人口や昼夜間人口比率を総合的に判断すると、7都市圏の人口動態は1970～2000年において、異なる変化パターンを見せていることが示されたとみなすことができた。